大会報告

奈良インカレ レポート

松澤俊行

日本学生オリエンテーリング選手権大会 2008 年 3 月 8-9 日 奈良県奈良市

3 月 8 日-9 日の両日、奈良市（旧都祁村エリア）にて、2007 年度の春インカレが開催された。ここでは、上位者の発言に注目しつつ大会の様子をレポートしたい。

2008 年 3 月 8-9 日 奈良県奈良市
日本学生オリエンテーリング選手権大会
ミドルディスタンス / リレー競技

3 月 8 日（土） ミドル競技

ミドル男子決勝 2.55km↑225m

1	日下雅広	0:26:00	東北 3
2	千々岩瞳	0:27:48	東北 3
3	入谷健元	0:29:35	京都 4
4	早瀬 悠	0:30:01	茨城 4
5	崎田孝文	0:30:34	名古屋 3
6	海老成直	0:31:14	中央 4

ミドル女子決勝 2.08km↑185m

1	関谷麻里絵	0:30:21	京都 3
2	千葉 妙	0:32:04	筑波 4
3	笠原 綾	0:33:19	日本女子 4
4	臼倉由起	0:33:55	岩手 4
5	井手恵理子	0:34:01	日本女子 4
6	阿部ゆかり	0:34:49	東北 3

初日のミドルは、男子が日下雅広（東北大 3 年）、女子が関谷麻里絵（京都大学 3 年）の優勝となった。両者とも 11 月のロングに続く優勝。関谷は昨年のミドル優勝者、日下は昨年のリレー個人トップタイム（パターンの振り分けは無視）の獲得者でもあり「順当勝ち」の感もある。とはいえ、観戦者から見れば、優勝争いは混沌とすることが予想されたし、本人たちも気を引き締めて臨んでいたようであった。以下、レース直後および表彰式でのインタビューからのコメントを記す。

ミドル男子選手権優勝
日下雅広 東北大 3 年）

（ゴール後の第一声）
「ビジュアル以降、ミスをしてしまい、反省されます。それでも、何とかレースをまとめ上げることができたと思います。」

（表彰式にて、翌日のリレーに向けて）
「東北大は 2 連覇を目指してこの一年取り組んで来ました。応援宜しくお願いいたします。」

ゴール後にまずミスを振り返る殊勝さ、ミス後にも決して崩れない冷静さ。表彰式での落ち着いた態度も、翌日の好走を予感させた。果たして日下選手は、翌日のリレーで周囲の期待通り、再び個人トップタイムをマークすることになる。

ミドル女子選手権優勝

関谷麻里絵（京都大学 3 年）

「コースは本当にきつかったです。これを 25 分ということはないだろう…と思いながら走っていました。膝を故障し、走れない時期が続いていましたし、優勝という結果は本当に嬉しいです。」

（4 年次の目標について）
「ロング・ミドルも勝ち、個人 5 連覇を達成します！」

故障による苦労はあったようだが、関谷選手の強さは健在だった。東北大女子の例を見ても分かるように、確固たるエースがチームを引っ張り、後輩の力を引き上げれば、新人を交えたチームでもリレー上位進出は充分可能だ。来年はリレーで選手権クラスを走り、そして表彰台に乗る関谷選手の姿を見たいインカレ・ファンも多いことだろう。

日本女子大学 4 連覇を決めたウイニングラン。（笠原綾 / 松永真澄 / 井出恵理子）

3 月 9 日（日） リレー

リレー選手権クラスは男子が名古屋大学、女子が日本女子大学の優勝で幕を閉じた。名古屋大学は 22 年振りの優勝。前回優勝時には、今回のメンバー3 人はまだ生まれていなかった。一方日本女子大学は 4 年連続の優勝。会場にいた学生（過年度学生を除く）は、インカレリレーの女子選手権クラスでは日本女子大学の優勝しか見ていないことになる。

両校の中心メンバーに、チームの様子をレポートしてもらった。

男子リレー結果

1	名古屋大学	2:27:41
	(寺村大/小林知彦/崎田孝文)	
2	東北大学	2:31:47
3	京都大学	2:35:53
4	早稲田大学	2:38:48
5	千葉大学	2:41:36
6	筑波大学	2:42:30

女子リレー結果

1	日本女子大学	2:09:53
	(松永真澄/井手恵理子/笠原綾)	
2	筑波大学	2:13:32
3	東北大学	2:34:26
4	京都女子大学	2:55:12
5	相模女子大学	2:56:24
6	茨城大学	2:56:29

名大優勝の真相に迫る

名古屋大学 1走　寺村大

まさかインカレリレーで優勝できるとは…、正直当事者の私も想定外でした。

ちなみに名古屋大学がインカレリレーで優勝したのは 22 年ぶりです。22 年前のその日、私はまだ産まれてもいませんでした。それだけで今回の名大の優勝がどれほど偉業だったことか、認識させてくれます。

さて、これを読まれている読者の方々はきっと、いや絶対にこう思っていたはずです。「今年の優勝は間違いなく東北大、次点は東大、京大だ」と。実は私達名大のリレーメンバーもそう思っていました。それほどこの 3 校は優勝常連校としての実績、また個人能力の高さ、それらで名大を圧倒していたと思います。では、なぜ東大、京大どころか王者東北大を破り、インカレ観戦ガイドの順位予想ランキング五位の名大が優勝を手にしたのか。今回はその謎を当事者である私、寺村が考えてみようと思います。

名古屋大学男子 1走・寺村から2走・小林へ 6 位でチェンジオーバー。この時点でトップとの差は2分50秒。

優勝要因①

世界最高峰の地図

2005年の夏にご存知のとおり世界選手権(以下、WOC)が愛知で行われました。それに合わせ多くの愛知テレインの地図が世界最高水準の精度のものになりました。そのような変化があった2005年こそが今回のリレーメンバーが入部した年です。入部当初からそのような高精度の地図で練習できたのはとても幸運でした。

名古屋大学男子2走・小林でトップに立つ。6秒後に東京大学、8秒後に早稲田大学が続く混戦状態

優勝要因②

部外との交流活発化

近年、名大の部外の方と交流する機会が増えたように思います。名大コーチで京大OBの鈴木さん(S木さん)、椙山コーチで東北大OBの安斎さん、このお二方にご協力いただき始めた時期もおよそリレーメンバーが入部した頃のことでした。また他にも東北大OBの松澤さんをはじめとした愛知県の社会人の方々と交流する機会が多くなりました(例えば、一緒に練習会に参加したり、全日本リレーに向けて努力し合ったり)。このようにして私達は部内だけでなく部外出身者や部外の方々からもご指導を受けることのできる機会が多くなりました。こうした部外からの刺激は、これまで実績が乏しかった名大としてはとても大事なことだったと感じています。

優勝要因③

運命の3人

寺村、小林、崎田、この3人が同じ2005年春に同じ大学の同じ部活に入部できたこと、これこそが優勝の最大の要因だと思います。

3人がともに高校時代は運動部に所属しており、ポテンシャルが高かったのは確かです。それ以上に大きかったのはこの3人が本当に負けず嫌いだったことです。特に小林と私は1年生のときから競うように大会・合宿に参加していました。例えば、阪市戦、そんび～ず大会にも1年生ながら最長クラスに参加(どちらも5時間レース)、そして東北大合宿にも1年生2人で乗り込みました。今思えば、相当なオリエンばかでした。でもそうして「ばか」をやってきたからこそ、今の自分達があるのだと確信しています。崎田も1年のインカレロングのMFで大敗したのをきっかけにミドルMFで優勝に執念を燃やすような奴でした(結果優勝、そしてJWOCへ)。そんなお互い高め合うことのできる仲間が身近にいたことが、3人のレベルアップにつながりました。そしてそのような3人がいたからこそ、1年生のときから「この3人がいれば、4年生のインカレリレーで優勝できる」と信じ、今まで努力することができました。実際に小林は、1年生のとき、東北大合宿の夜のミーティングで「オリエンを通じての最終目標」として「4年次にインカレリレー優勝」を高らかに宣言していました。

ところで2005年度のインカレリレーで名大が20年ぶりに入賞しました(つまり前回入賞は優勝にて)。そのリレーの入賞の感動を目の前で、しかも尊敬する先輩達が成し遂げたことは当時1年生だった私達に強い影響を与えたのは間違いないです。

そんな共通目標を掲げて切磋琢磨し頑張ってきた3人だったからこそ、団結力は並大抵のものでなかったのだと思います。だからこそ今回のリレーで3人ともがそれぞれの役割をこなし、総合力で他の大学を破ったのだと思います。

優勝杯は22年の時を経て名古屋へ

インカレ連覇を目指して

さて、次なる疑問は「名大は2連覇できるか」です。答えは、「簡単ではないが不可能ではない」です。間違いなく来年も優勝候補筆頭は東北大だと思っています。しかし、これで諦めるわけにはいきません。あくまで私たちの目標は、今でも「4年次にインカレリレー優勝」です。2連覇をして涙涙の引退をしたいです。そして実際に、今は後輩の力が伸びてきているのが大変心強いです。後輩の中には「俺があと2年走って3連覇します！」と宣言している強気な部員もいます。そんな心強い後輩がいて、学年を超えた競争をしていけば部全体のレベルアップにつながります。来年はもしかしたら今年の優勝メンバーでないメンバーで優勝するかもしれません(個人的には来年も走る気満々ですが)。

最後になりましたが感謝の言葉を書いて終わりにしようと思います。

インカレ運営の皆様へ。インカレ運営ありがとうございました。名大優勝も皆様がお忙しい中運営してくださっ

たからこそ実現できたことです。本当に素晴らしい大会をありがとうございました。

名大・椙山の先輩方、コーチの方々、愛知県の社会人の方々へ。日ごろから名大・椙山をご指導いただきありがとうございます。皆様への感謝の気持ちを22年ぶりの優勝という結果で示せたことを大変嬉しく思っています。今後ともよろしくお願いします。

そして、名大・椙山の部員のみんなへ。今回の優勝は部員全員で勝ち取ったものだと思います。みんなの応援はたとえ森の中でもリレーメンバーの心に響いていました。本当に心強かったです。これからもみんなでもっともっといい部活にしていこうな。

（名古屋大学１走　寺村 大）

日本女子大学３走・笠原綾
歓喜のフィニッシュ

奈良インカレを終えて

日本女子大学/ 井手恵理子・笠原綾

私たちが１年生の日光インカレで、先輩方にウィニングランを見せてもらった。あの感動から３年後、最後の奈良インカレ。自分たちの手で日本女子大学の旗を持ち、レーンを駆け抜けることができた。日本女子大学４連覇。夢を見ていたことが現実になった。

私たち（井手＆笠原）は、４年間同じリレーチームで走ることになった。信頼は大きかった。そして、そんな４年生２人と一緒に走るのが嬉しいと言ってくれた松永。このメンバーなら気負うことなく楽しんで走れると思った。リレーメンバーは、各々のオリエンテーリングスタイル、得意レッグや苦手なレッグ、インカレ前の心情等をお互いに理解していた。２年連続同じメンバーということ以上に、それだけ共にサークル活動してきたからだ。だから、４連覇を目標とするのではなく、昨年度同様に「各々が自分のレースをして襷を繋ぐこと」をチームの目標とした。

事前にリレーメンバーでリレースケジュール表を事前に作成し、情報を共有しておいた。当日、自分が他のメンバーにいて欲しい時間や場所、手伝ってほしいこと等を把握できていた。

１走の松永。前日の個人戦で怪我をしていたのにも関わらず、それを全く感じさせない快走を見せてくれた。それに勇気づけられ、２走井手、３走笠原が続いた。決して背伸びすることなく、自分らしいレースをすれば良いという信頼。「走っているのは自分の出走時間だけだが、信じることはいつでもできる」という今井監督の言葉通り信じ続けた。このチーム力が襷をゴールへと運び、そして結果へと繋がったのではないかと考えている。

１走・松永から早くも２位に３分以上の差をつけるレース運び。２走・井出へ

もちろん、このチーム力はリレーメンバー３人だけで築いたものだけではない。併設に出走した日本女子大学の３チームも、チーム内でしっかりと目標を決めて走り、それを達成していた。日本女子大学としてお互いに理解し合える環境ができていたことが、学校代表として走る選手権メンバーを精神的に支えていた。また、普段から活動を共にしている早稲田大学、東京理科大学との一年間の活動があったからこそ、全体としてチーム力が生まれたのだと思う。そして、いつも私たちを見守り、熱くご指導して下さった今井直樹監督を始めとするオフィシャルの方々、そして多くのＯＢＯＧさんのお力添えに心から感謝している。

2008 年度、日本女子大学、そしてＯＣは新入生を向かえて新しいチームとなる。ＯＣは毎年、インカレリレーで最後の１人がゴールするまで自然にみんな笑顔で肩を組みながら、応援歌「紺碧の空」を歌う。それがサークルの誇りだと思う。後輩たちには、自分たちらしい目標を決めて、それに向かってサークル活動を続けてほしい。そして、楽しんで活動した１年間が、また次の３月のインカレでみんなの笑顔に変わることを願っている。

（井手恵理子・笠原綾）

２走・井出恵理子は１走でつけた差を守り３走・笠原綾へと繋ぐ

参加者の減少により、存続も危ぶまれるインカレであるが、参加学生の意欲と当日の興奮はいささかも衰えていない。2008 年度の学生オリエンテーリング界でも、引き続き熱い闘いが展開されることを望みたい。

（構成：松澤俊行）